木田市長の ど～んとコミュニケーション

真珠のように輝く
まちづくりのために

vol.38

パラリンピックがくれたもの

北京パラリンピックの熱戦がマスコミで盛んに報道されました。

パラリンピックは、４年に１度オリンピックの開催と平行して行われる「もう一つの(parallel)」オリンピックのことです。

そこで繰り広げられる競技は、とても障がいを持っているとは思えないような力強いものでした。

今年６月に市内の旅館で壮行会が行われた、伊勢志摩バリアフリーツアーセンターの調査員で、車いすバスケットボールの別当由香選手の活躍もテレビで見ることができました。

また、陸上競技の南アフリカのピストリウス選手は、両足とも義足ながら、健常者の記録に迫る走りを見せていますが、彼は「自分が障がい者だと思ったことはない」と話しています。

市内の旅館で別当選手の壮行会が行われました

平泳ぎ50メートルで金メダルを獲得した鈴木孝幸選手は、右足は付け根から、左足は太ももの中間から先がありません。右腕もひじから先がなく、左腕は親指と薬指が失われています。

そのような障がいを持ちながらオリンピックで優勝するとは、まさに「すごい」としか言い様がありません。どこから推進力を得るのだろうかと、不思議なくらいです。

サンデーモーニングというテレビ番組の中で、元プロ野球選手の張本氏がこのように発言していました。

「パラリンピックの選手の頑張りを目の当たりにして、われわれがさまざまなことにクヨクヨしたりすることが、とても小さなことに思われた。これからはもうクヨクヨしない」。

この張本氏の発言に代表されるように、障がいを持つ選手の頑張りが、世界中の人々に感動と元気をプレゼントしたことは間違いないことでしょう。

パラリンピックに出場している選手一人ひとりが、それぞれ言葉では簡単に言い表せない人生のドラマを持っていると思います。その苦労や悩み、そして悔しさを思えば、私たちはクヨクヨしてはいられません。

人権文化の花を咲かせよう

Vol.77

パラリンピック

一番きれいな色って
　なんだろう？
一番ひかってるものって
　なんだろう？
僕は探していた
　最高のＧＩＦＴを
君が喜ぶ姿を
　イメージしながら

つい先日までしきりに流れていた、ある局のオリンピックテーマソングの一部です。今回はパラリンピックについて掲載します。

「パラリンピック」の名称は、半身の不随（パラプレジック）＋オリンピックの造語ですが、半身不随者以外の選手も参加するようになったため、１９８５（昭和60）年から、平行（パラレル）＋オリンピック＝「もう一つのオリンピック」と解釈することになったそうです。あくまでも、夏季オリンピックとパラリンピック、「二つのオリンピック」が並列であることに着目したいと思います。

さて、パラリンピックを世間が注目するようになったのは、１９８８（昭和63）年に夏季オリンピックと同一の開催地になった、ソウル大会からです。パラリンピックが注視されることによって、障がい者スポーツが広く認知され、多くの分野で貢献がありました。

パラリンピックは回を重ねるごとに「競技性」が高まりましたが、これに伴い、「常備薬とドーピング」、「機具」、「障がいのクラス分け」、「障がい偽装」などの問題点も出ています。

パラリンピックの振興は、福祉だけではなく「スポーツ文化」全体の発展につながる「文化」としての理解と支援が求められています。